# NPO

# 支援の中継役としてマッチングと コーディネートを行う。

福島市

佐藤 和子 NPO 法人 ふくしま NPO ネットワークセンター 理事長

取材日

2011.5.13

震災後、被災者と支援者のマッチングやコーディネートを行う「ボランティア・マッチング・プロジェクト」を立ち上げた。4月 27日には「ふくしまNPO市民活動団体連携復興プロジェクト会議」を設立、緊急対応を行う「被災者支援部会」、中長期対応の「復 興計画部会」を設置し、被災者への支援と福島の復興に取り組んでいる。

### 3月11日 14時46分

福島市内にある自宅とオフィスのあるビルで、大きく長い揺れを感じた。最初はいつもと同じ揺れぐらいにしか感じなかったが、次第に揺れが大きくなりただならぬ状況を感じることになった。オフィスは9階にあり、書棚の中の本は飛び出し大きな机も大きく揺れ、足の踏み場がない状況に陥った。机にしがみついて揺れがおさまるのを待った。隣近所から、女性の「キャー」という悲鳴が聞こえた。

まず、10階自宅の飼い犬を救出した。余震が長い間続いたが、揺れが落ち着き始めた時に階段で1階まで駆け降りた。1階に避難した多くの人々と大きく揺れるビルを眺めながら、不安なまま時間は過ぎていった。

## ライフライン

揺れているうちに電気が切れたが、次の日の朝7時半頃に復旧した。水道は1週間後の18日に復旧、幸いな事に都市ガスは地震によって寸断することはなかった。

食糧を求めて市内のコンビニに並んでいる人々の姿は見られたが、ある程度の備蓄をしていた人々も多く、この大震災で大いに役に立った。自宅には数ヶ月困らない程の食糧があったので、近所の人々に配布した。

事務所は1週間ほど断水したが、事務所や自宅にはそれぞれ、いざという時のために飲料水をケースで用意していた。給水車も出動していたが、福島市内は井戸がいたる所にあり、井戸水を近所に配ったり、井戸水を使って営業を始める飲食店もあった。道路沿いの井戸がある家庭は、「ご自由にお使い下さい」と声がけをし、市民同士が助け合う光景も見られた。

普段賑やかな街中が、震災当時はとても静かに 感じた。ガソリンが手に入りにくく、多くの人々 が家で自主待機、自主避難していたためだ。飼 い犬や飼い猫の餌は備蓄がなく、百貨店に並ん



だ。福島市内には停電しない箇所もあったので、 商品がなくなるまで営業を続けたコンビニも多 かった。

福島にとって福島原子力発電所の問題が終息に向かわない限り、震災から2カ月過ぎた現在でも、普通の暮らしに戻ったとはいえない状況が続いている。

### 震災を受けて

福島市には浜通りからの避難者を中心に3,000 人以上の人々が避難している。

情報収集をし、ふくしまNPOネットワークセンターのホームページ上でツイッターを利用して次々と情報提供を続けた。全国からの物資やボランティア派遣等の支援を受け、大きな被害を受けた浜通り地区へのつなぎ役も務めている。また、NPO法人ふくしま飛行協会が管理する「ふくしまスカイパーク」では、震災翌日から災害支援物資中継、原発対応人員輸送、航空写真に対応するためのヘリコプターの離着陸が行われた他、原発上空撮影無人ラジコン飛行機の操作ミッションを受け入れるなど、空の玄関口として協力活動を行っている。

福島は原発を抱えているので、被災地の職を失っ て避難している人の就職支援を行いたいと思っ

ている。原発に対して、福島県としての市民レ ベルの意見出しを行いたい。

東日本大震災で感じたことは、行政の対応が早 く、ボランティアの派遣や支援物資の供給がス ムーズに行われていたことである。過去に起き た阪神大震災などの経験が今回に活かされたよ うに感じている。



撮影:2011.5.13 かつての住宅街

NPO

# 支援活動に注力した 2 カ月。 複雑化を増した地域の課題。

郡山市

鈴木 和隆 NPO 法人うつくしま NPO ネットワーク 事務局長

取材日 2011.5.31

福島県内で活動するNPOの活動を促進するための支援活動を行い、市民自らが考え行動してゆく活力ある社会づくりを目指して 設立された。震災直後は中間支援組織としてすぐさま支援活動に取り組み、自らも被災して動けないNPOに代わって支援活動を展 開するために郡山、会津、いわきに基地を設置し、緊急支援・復旧支援に取り組んだ。

### 3月11日 14時46分

地震発生の時はいわき市の自宅にいた。家屋は 無事だったが、部屋の中の書棚はすべて倒れた。 自宅は高台にあったため津波の被害は免れた。 電気は無事だったが断水は約1ヶ月間続き、そ の間は給水所へ通った。食糧は「このような緊 急時に鈴木さんが活動できないのでは困る」と 多くのNPOから支援をいただいた。ガソリンも 不足がちで、職員が交代で給油を行うなど、み んなが助け合いながらライフラインを確保して いた。

地震については、これまで経験した中で最も大き く、長いものというのが率直な感想だ。津波の被 害と原子力発電所の問題で、3月11日の夜から 翌日の朝にかけて、いわき市民約34万人が避難 し、その後も1日か2日で3-4万人が避難した。 「これは大変な事だ」と、組織として非常態勢を とり事務所も24時間体制を始めた。

#### 震災直後からの活動

福島県で活動する中間支援組織である当会は、東日 本大震災の支援活動として活動のフェーズを、



#### ①緊急支援

(命をつなぐ支援)

- ②生活・企業・商店・学校支援 (生活を立て直す支援)
- ③復旧支援

(地域の安全・安心を確立するための支援)

④復興支援

(豊かな地域を創造するための支援) に分けた。期間も3月-4月、5月-6月に分け、3 月-4月は緊急支援として救援物資の調達・配布